1 Ｔｒａｃｋ０１：『もう無理。。。処女の限界……。』

『お前んちの姉ちゃんって、声かわいいよな？』

中学時代、同級生にそう言われた時は、
いまいち、ピンとこなかった。

普段から聴き慣れた家族の声。

意識するようになったのは、同じ高校に入ってからだろうか。

ひとつ年上の姉貴が、放送部に入って校内放送でしゃべるように
なってから、段々と気にするようになった。

『わたし、声優になろうと思うんだけど――』

そんな話を聴いたのは、俺が高校２年の頃だ。

卒業を数ヶ月後に控えた姉貴が、腰まであった髪をばっさりと
切ったのも、この頃だった。

その頃の姉貴には、親にも言えない秘密があった。

最初は弟の俺にも隠していたけど、ひょんなことから、
その『正体』を知ってしまった。

そう、姉貴が目指していた声優――

それは、一般的なアニメなどに出演する『表』の声優ではなく。

美少女ゲーム……それも年齢制限のある、
１８禁ゲームの声優だったのだ。

姉貴は、未だにそのことを親には話していない。

たまたま、そういうゲームをプレイするのが好きだった俺にも、
口止めを頼んできた。

『自分の仕事に誇りは持ってるし、
恥ずかしいと思ったことはないけど……』

『生理的に受け付けない人もいるだろうから、
周りの人たちには言わないでほしい』

昔から姉貴は真面目だったし、
優等生として両親からも将来を期待されていたから、
それを裏切りたくなかったんだろう。

それでも俺は、楽しそうに美少女ゲームの仕事の話をする、
姉貴のことが好きだった。

東京で一人暮らしをしていた姉貴を心配して、
同居するよう親に言われたのは、今年の春のことだ。

「……で、どうだった？　今月のラジオの感想……」

**「お姉ちゃん、ヘンなこと言ってなかったよね？
聴いてて、処女臭い発言とかなかった？？？」**

今日は、毎月1回のラジオ配信日。

『紅衣ほむらのとっても性的なラジオ』というタイトルを聴いた時、
正直、心配しかなかった。

というのも、昔っから姉貴には男っ気というのがなく。

姉弟の間で、リアルな性的話題が会話に出てくることは、
ほとんどなかった。

**「処女臭い発言って言われても……よくわからないよ。
俺も、そういうのに詳しいわけじゃないし……」**

**「……もう、頼りないなあ。
いつ訊いても『わからない』ばっかりじゃん。
こっちは真剣に悩んでるのに……」**

悩んでいるのは、こちらも同じだ。

先月のラジオ配信の時に、
姉貴が処女だというのをカミングアウトされて、
その反応にも困っているというのに。

「そりゃあ、お姉ちゃんも浅はかだったと思うよ？」

**「たまたま出演したラジオ番組で、ぶっちゃけキャラをやってみたら、
それがウケちゃったせいで、こんなことになっちゃって……」**

**「リスナーさんからだけじゃなく、業界の関係者からも、
シモネタOKな声優だと思われちゃうしさ」**

**「……男の人と付き合ったこともないのに、
まさか自分が、男性の性的な悩みを解決する番組を任されるなんて……」**

思わず、笑みが浮かぶ。

愚痴ったり、しょんぼりしている姉貴がかわいくて、
年下なのに親心みたいなものが芽生えてしまった。

頭を撫でて励ましたいところを、ぐっと我慢。

結局、いつも笑って話を聴くだけになってしまう。
深刻な面持ちで相談に乗るのは、
姉貴を余計に悩ませてしまう気がして。

「んもぉ、笑ってないで少しは慰めてよー。
こっそり、ラジオにお便り送ってきてるの、知ってるんだからね？」

どんっと肘打ちされて、同じベッドの端に腰を下ろしてくる。
部屋ではいつも薄着で、スタイルもいいから、
目のやり場に困ってしまう。
仕事では顔出しもしているけど、やはりファンの間では、
胸が大きいことも話題になっていた。

「……お姉ちゃんも、がんばって彼氏作った方がいいのかな」

「え……彼氏？」

内心、ドキッとする。
もし姉貴に男がデキたら……と考えると、
俺の居場所もなくなるし、諸手を挙げて祝福できるかは、
わからなかった。

「自分でも不思議なんだよね。
弟だったら、こうやって普通に話せるのに、
他の男の人だと妙に身構えちゃって……」

「もちろん、仕事で会う人たちとは話をしてるよ？
でもそういうのって、ビジネスモードのスイッチが
入ってるから、そもそも異性として見てないしね……」

たまに仕事の電話をしている時があるけど、
確かに、普段とは違ってビジネス口調の受け答え。
目の前に相手もいないのに、頭を下げながら会話をしていて、
他人事ながら大変だなと思っていた。

「……大体さー。エロゲー声優してるのに、
中の人はバージンっていうの、どう思う？」

「自分でも、どうかと思うんだよね。
ゲームの台本を読んでても、いまいち感情移入できない
というか……」

「演じてる女の子が、主人公の、その……おちんちんを見て、かわいいって言ったり、おっきいのが好きとか、奥に当たって気持ちいいとか、経験したことないから、ずっと、はてなマークだし……」

処女のエロゲー声優……ファンの人たちが知ったら喜びそうだけど、姉貴の心配もわかる。

経験のあるなしで、キャラへの感情移入度も違うだろうし。

いわゆるエッチシーンの台本をチェックする時は、いつもひとりで、ブツブツ呟きながら頭を抱えていた。

「……セックスって、そんなに気持ちいいのかな」

隣でポツリと口にする姉貴に、心臓が飛び跳ねる。

ゲームのセリフでは何度も聴いたことがある言葉だけど、日常会話で言われると、妙にエロく感じた。

「そっちは……したことあるの？女の子と……エッチなこと……今までカノジョができたって話、聴いたことないけど……」

澄まし顔をしていたけど、カノジョがいたら、二十歳を過ぎて姉貴と同居なんてしていない。

最近は『ステイホーム』が騒がれているし、そもそも出会い自体なかったりする。

未だに童貞だっていう焦りはあったけど、姉貴が処女だという話を聴いてからは、なんとなく、安心もしていた。

「もし経験がないんだったら、あたしたち姉弟って、ヤバくない？今の子たちって、割と学生の頃からそういう経験しちゃうんでしょ？」

「あーほんと、どうしよ……この先、ずっとああいう、シモネタ大好き声優みたいなノリでいくの、無理そうなんだけど……」

「……今さら、バージンでしたってカミングアウトするのも恥ずかしいしさ……」

弟の俺が言うのもなんだけど、姉貴は顔出ししてもまったく恥ずかしくないぐらい、かわいくて男にモテそうだと思う。

その気になれば、彼氏なんていつでもできるんじゃないかってぐらい。

……あと全体的にカラダがムチムチしていて、
間違いなく男好きするタイプだ。

そして最終的には、こんなことを考えてる弟の俺が、
一番気持ち悪いという結論にたどり着いていた。

「ねえ、どうしたらいいと思う？　お姉ちゃんも、誰かと……エッチしてみた方がいいのかな……」

「でも、いくら仕事のためだからって、好きでもない人と、そういうことするの嫌だし……うーん、悩むぅ……」

個人的には、反対したい……けれど。

姉貴の悩んでる姿もよく見ているから、即答もできなかった。

それに、好きでもない男とするぐらいなら――

「……あのさぁ。急にこんなこと言うの、アレだと思うけど……」

「少しだけ……おちんちん、見せてほしいって言ったら、怒る？」

「お、おちんちんっ！？」

「……ええっ、そんなにびっくりする？だ、大丈夫だよ？　いきなり襲いかかったりしないし」

「こんなこと頼めるの、他にいないから……一応、ダメ元で訊いてみようかなって思って……」

一時的に、頭の中がパニック状態に陥る。

姉貴も恥ずかしかっただろうけど、
それ以上に顔が赤くなっていた自信がある。

「ダメというか……俺たち、姉弟だし……」

「……そうだよね。いくらお姉ちゃんでも、こんなこと言うの気持ち悪いよね」

そうじゃない、そうじゃないんだけど……

言葉が上手く出てこない。

こういう機転の利かないところが、
カノジョができない原因なんだろうなとも思う。

「おちんちんを見たのって、子供の頃にお風呂が一緒だった時ぐらいだから……親指ぐらいの小さいサイズしか記憶にないの」

「でも、今は大人になったわけだし……あの頃よりは、大きくなってたり……するんでしょ……？」

横からチラチラと視線を向けられて、
ますます言葉に詰まった。

親指サイズの記憶しかないのはなんとかしたいところだけど、
自分から見せびらかすというのも抵抗がある。

「はぁ……ゲームだったら、よくあるシーンなんだけどなあ」

「こんな風にお姉ちゃんが弟くんに迫ってぇ……」

「え……」

ずいずいっと横から身を乗り出してきて、
姉貴は顔を近づけてくる。

わずかな動きでも、ふんわりといい香りが流れてきて、
思わず、ピンと背筋を伸ばしてしまった。

「……ねえ、おちんちん見せてくれる？」

「ぶっ！？」

「お姉ちゃん、おっきくなったオトナのおちんちん、見てみたいなあ……」

一瞬、真に受けてしまったけど、
すぐに演技だと気付いて、襟を正す。

もし、自分のカノジョが声優だったら、
こういう声で迫られたりするのかな……。

たったひとつふたつのセリフで、妄想が留まることを知らない。

「こんな感じで誘惑しちゃうの。でも、さすがにゲームとは違うよね。姉弟でそんな裸を見せ合うなんて……」

「ええっ！？」

次々、口にされる過激ワードに反応せずにはいられなかった。

確かに、ゲームではそういうシーンも多いけど……。

「……え？　なんでまた驚いたの？　お姉ちゃん、何かおかしいこと言った？」

「いや、裸……」

「……ああ、裸を見せ合うっていうの？
だって、お姉ちゃんだけおちんちんを見せてもらうの、ずるくない？
片方だけ、恥ずかしい思いをするなんて……さ」

「だから……もし、お姉ちゃんの裸も見たいって言うなら……
もちろん、すごい恥ずかしいけどっ……うん……」

赤面してる姿を見ていたら、こっちまで恥ずかしくなってくる。

ある意味、うちの姉貴はエロゲーのヒロインより、
『エロゲーっぽい』かもしれない。

しかも、妙なところで律儀というか……
見せてもらえるなら自分のもという発想は、
俺の中になかった。

「……やっぱり……ダメ？
お姉ちゃんには、おちんちん見せたくない…？」

「み、見せたくない……というか、さ」

困る。

たまに姉ゲーというのをプレイして、弟のヘタレっぷりに
辟易してたけど、実際に自分がこういう状況になると、
強気にはなれないんだってわかった。

「ふふっ。ゲームみたいに、お姉ちゃんにも弟を誘惑できる
ような勇気があればよかったのにな……」

「ごめんね、ヘンなこと言って。
いくら昔から姉弟の仲がよかったからって、嫌だったよね」

勇気がないのは、俺も一緒だ。

姉貴の仕事のことは応援しているし、
力になれるなら、協力してあげたいとも思う。

でも、肝心なところで一歩踏み出せない。

そんなところは、姉弟揃って一緒だった。

「……よしっ。お姉ちゃん、明日はゲームの収録があるから、
台本のチェックをしてくるね。話を聴いてくれてありがとっ」

自分を奮い立たせるように膝を叩いて、
姉貴は横を立ち上がる。

そして俺の肩をぽんっと叩くと、
いい香りを残したまま、部屋をあとにしていった。

「……揺れすぎなんだよなあ」

薄着だったために、ちょっとした動きでおっぱいが揺れて、
自分の姉を性的な対象として見てしまいそうになる。

姉貴が見たいって言うなら、減るものでもないし、
見せてあげたいけど……。

（……ぜったい、勃起しちゃうよな）

それが確信できるだけに、安易に『見せてあげるよ』とは言えない、
俺だった……。

※トラック２へ